

真知子

03求婚

エリ

冬の弱い日差しを受けて、電気自動車工場の屋根が輝いている。

昼食の鐘が鳴り響き、作業服を着た工員たちが、工場から一斉に吐き出される。

* * *

割烹着を着た真知子が、給食室の配膳の前に立ち、ご飯をよそっている。

作業着姿の保夫が近づくと、にっこり微笑み、そっと茶碗を差し出した。

「お疲れ様。今日の夕方あいてるかな？」

保夫が言い終わらぬうちにうなづく真知子。

「いつもの店で待っていて、大切な話があるんだ」

恥ずかしそうにうなづく真知子。去っていく保夫の姿を追いかけ、並んでいた工員にご飯を催促される。

* * *

ロッカールームで、割烹着を脱ぐ真知子。膝丈の桃色のワンピースに着替え、髪を整え、化粧を直す。

* * *

喫茶店でコーヒーを飲む真知子。壁の時計をチラッと見る。

大型のバックを抱えたパンツスーツ姿の美也が現れる。

「真知子さんね。わたしは保夫の幼馴染の美也。保護区であっているのだけど、覚えているかしら？」

首を横に振る真知子。

「そう。あなたはセンターの客室に隠されていたものね。覚えてなくても無理はないわ。座っていいかしら？」

「どうぞ」

真知子が答えると、美也が向かい側席に着き、ミルクティーを注文する。

「あなた、星占いをするんですってね。わたしのこと占ってくれない？」

「生年月日と生まれた時間と場所が分かれば占えます」

手のひらサイズの端末を取り出し、メモ帳を呼び出す美也。

「2065年9月18日、午前5時30分、神奈川県よ」

「分かりました。ちょっと待ってください」

端末を取り出し、データを入力する真知子。モニタにホロスコープが表示される。紙を取り出し、指でモニタをなぞりながら、紙にメモしていく。

「自分で自分を奮い立たせる小三角形が多くて、とても運勢の強い方。それでいて周囲の感情に敏感に反応して、どうすれば実現されるか具体的に考えられる人。ぱっと見た印象はそんな感じかしら」

「インテリア関係の仕事をしているのだけど、仕事で成功できるかしら？」

「金星が12ハウスにあるので、自分の居場所を美しいもので飾りたがる傾向があるけど、仕事は

太陽星座からいっても、6ハウスの支配星が3ハウスにあることからいっても、書類作成などサポート的な仕事に向いているようです。土星の6ハウスは管理職にも向いているし、天王星の6ハウスは自分のリズムで動ける自由がある方が向いているといえます」

「実は、保護区に帰るように誘われているのだけど、インテリアコーディネーターの夢も捨てられなくて」

「保護区は義務さえ果たせばあとは自由だと聞くから、戻ったほうが自分らしく生きられるんじゃないかしら」

「でもインテリアを自分で作るなんてわたしには無理よ」

「企画や進行管理を美也さんがして、製作は別の人に頼んだらどうかしら。あなたならみんなを引っ張っていけると思う」

「ほんと？ わたしにできると思う？」

「ええ、運も強いし、努力もする人だもの、きっとできると思う。わたしには好きな人と結婚すること以外、夢なんてないもの。美也さんがうらやましい」

美也の手をとり、優しく語り掛ける真知子。

店の入り口が開き、保夫が入ってくる。

「遅くなってごめん」

真知子が首を横に振り、笑顔で答える。

美也が手招きして、自分の隣に保夫を座らせる。

美也と保夫を交互に見る真知子。

保夫の肩に手をのせ、笑みを浮かべる美也。

「わたし、保護区に戻ることにしたわ」

「それは良かった。真知子さんに会えたかいがあったよ」

「大切な話って、美也さんのことだったの？」

「いや、違う。保護区に帰る話のことさ。気持ちは変わらないね？」

うなづく真知子。

「美也、真知子さんも一緒に保護区に戻ってくれるんだよ。給食センターで働いてくれるそうだし」

「ほんと、それなら是非出席してもらわないとね！」

顔を見合わせ、微笑みあう保夫と美也。二人を眺めて不安になる真知子。

「保護区に帰ったらなにかあるんですか？」

「ええ、わたしたち結婚するのよ！」

立ち上がる真知子。椅子が倒れて、大きな音を立てる。椅子を直しながら、真知子を気づかう保夫。

「真知子さん大丈夫、どうかしたの？」

「いえ、何でもありません。驚かせてしまいましたね」

座りなおした真知子に、美也がお願い事をする。

「小さいころからの付き合いだから、占わなくても結果は分かっているけど、真知子さんの口か

ら聞きたいの。ねえ、わたしたちの相性を占ってくれない？」

「もちろん、いいですよ。保夫さんのデータは既に登録されていますから、すぐに調べられます」

端末を操作する真知子。モニタには、結婚、恋愛、性の三つとも100%の数字が並んでいる。

好奇心いっぱいの瞳で、真知子のモニタを覗き込む美也。思わず画面を隠す真知子。

「相性は、そうねえ、えっと……とてもいいわ……恋愛でも結婚でも最高の相性よ」

見つめあう保夫と美也。保夫が美也の髪をなでながら語りかける。

「後悔はさせないよ。きっと幸せにする」

「ええ、絶対よ！ 夢だってあきらめないんだから！」

コーヒーカップに手を伸ばす真知子。手が震え、カップがカタカタと音を立てる。美也が振り向き、真知子の手に触れる。

「どうかしたの？」

「美也さん、わたしの占い、役に立ちました？」

「もちろん。真知子さんのおかげで、心を決められた」

「そうですか。わたしも決めました」

真知子を見つめる保夫。うつむき、コーヒーを飲む真知子。

「わたしは保護区には行きません。自由区に残って占い師になります。美也さんと話していて、それがわたしの夢だって気づいたんです」

言い終えた真知子が顔を上げると、保夫の視線とぶつかった。

「夢ができたなら仕方がない。とめたいけど、とめないよ。でも覚えておいて、いつでも歓迎するし、休暇が取れたら自由区まで会いに行くよ。離れ離れになっても僕たちは友達だ」

手を差し出す保夫。両手を伸ばして、保夫の手を包む真知子。真知子の手の上に手を乗せる美也。

「わたしのことも忘れないで。わたしたちもう友達でしょ？」

「ありがとう。お二人とも幸せになってください」

手をつなぎ去っていく保夫と美也。

一人取り残される真知子。